

②大倉山記念館の保存と活用

齋藤文人

一 記念館を取り巻く歴史的環境

横浜と東京を結ぶ東急東横線に「大倉山」という駅がある。近年、「大倉山」は都会派住民にとって住みたいまちの五指に入るとさえ言われている。しかし、この駅を降りた所に「大倉山」という町名は存在しない。戦前、それも大正期に近い時分を知る古老であれば、「大倉山」という名称の由来を知っているであろうが、今日住んでいる住民の中には、「大倉山」という地名の無いことに気が付いていない人もいるのではないだろうか。

この「大倉山」という駅名は、この大倉山記念館の前身である大倉精神文化研究所が、昭和七年にこの地港北区大尾町（当時神奈川区）に設置されたのを契機に「大尾（ふとお）」という従来の駅名が改名されたものである。

このように「大倉山」の新しいまちと古い建築物の織りなす空間に遭遇している市民と、そ

の市民が生みだす新しい文化と歴史の中に、記念館の存在を認識することができるのである。

① 建物の建築

現在、横浜市民の活用施設としてあるこの記念館は、昭和七年に、用紙業界で名をなした実業家大倉邦彦が、東西文化の融合を夢みて設立した（財）大倉精神文化研究所の活動拠点として建築したものである。この研究所の設計を担当した長野宇平治は、大正期の古典主義建築の第一人者として活躍した人物である。さらに、この設計者の師である辰野金吾は、日本の銀行建築史を築き上げた一人である。大倉山記念館は、この長野宇平治が取り組んだ最後の作品といわれている。大倉精神文化研究所の本館として使用されていた記念館の建築様式は、プレヘレニック様式と呼ばれ、外観はギリシャ神殿風であり、西洋の文化を象徴している。内部には、東洋的な文化の象徴としての木組みや装飾

- 一 記念館を取り巻く歴史的環境
- 二 記念館の象徴性（シンボライズされる記念館）が生みだす文化活動
- 三 施設の管理・運営が市民の主体的な参加によって生かされる
- 四 地域の中での施設としてのアイデンティティを求めて
- 五 これからのインテリジェントコミュニティ（情報化する地域）の核として

が施され、各部屋や壁面を構成している。東文化の融合を理念とした創立者大倉邦彦の精神が、長野宇平治という建築家によって、この記念館の建築に具象化されたのである。

② 「大倉山記念館」の設立

昭和五十六年三月に（財）大倉精神文化研究所敷地を、横浜市が公園用地として買収した際、建物が市に寄贈された。この建物は建築後約五〇年が経過していたのであるが、今日までほぼ原形のまま残されていた。さらに日本の建築学会から、昭和初期の代表的な建築物のひとつとして、リストアップされているなど文化的価値が高いために、横浜市では大規模な改修工事を行い、建物の保存を図るとともに昭和五十九年十月二十七日、市民の活用施設「大倉山記念館」として開館したのである。この記念館は、音楽会や各種集会などの市民の文化的活動の場に活用されることが主たる目的になって

写真—1 「大倉山記念館」全景



いる。

二——記念館の象徴性（シンボライズされる記念館）が生みだす文化活動

記念館の建物からうける印象は、古典と現代の両面が浮きでている。

①—古典文化の象徴

横浜市内の古典的西洋建築のほとんどが、横

浜開港、文明開化という近代史のなかで、その役割を担ってきた。また、それらの特徴は、市内全域に広がるものではなく、「ミナト・ヨコハマ」の窓口にあり、日本の入口でもあった。

しかし、この記念館は、歴史もさほど古いものではなく、他の西洋建築物のように日本の文化史の証人となったとは言えない。また、これら横浜の歴史の創世期における建築物と異なり、市民文化の形成に十分な役割を担ったとも言えない。特に戦前においては、精神文化研究所という私的な研究活動の歴史によって綴られてきたのである。戦後の一時期、国会図書館の分室として、社会的役割を担った時期もあったが、新しい研究活動が始まった頃より記念館として開館するまでの間、ふたたび社会的に閉ざされた状態が続いた。

市民の記念館へのイメージは、開館することが予定される以前から、ふたつに分けられていたといっても過言ではない。それは、音楽的センチメンタリズムと美術的センチメンタリズムである。このふたつは、建築物の歴史と印象性の中から生まれてきたものと言える。それは、とりもなおさず今までの日本の音楽、美術に西洋的な美意識に対する強い憧れと回顧情緒があったといえるのではないだろうか。

音楽を愛好する市民にとっては、この建物が、

「音楽の殿堂」であり、まさにクラシック音楽の響きと共鳴するなにもでもない環境を持つ建物なのである。

芸術的な側面からの市民の期待の多くは、建築物そのものが美術館という「器」を連想させるものであった。開館当時、美術館として開館したのと思った市民も数多くいたことから、そうしたことはうかがえる。

公園という環境の一部になっているこの建物は、短歌や俳句の素材でもあり、散策する人の心の文学的感性と詩情をつくりあげている。また、ギリシャ風の神殿を模写した建物であるために、演劇的な空間や背景としての野外劇などの上演に理想的なロケーションとして期待されていることも、確かなことである。

②—歴史的空間が生みだす現代性

「音」の歴史は、人間にとって切り離せない環境条件のひとつである。特に人間間のコミュニケーションにおいては、大きな役割を担うものである。音楽という法則的に定型化された音の歴史のなかから、新しい音楽芸術の実験や現代音楽を試みようとする活動が、この建物によって実践されようとしている。

一方、現代美術の発展は、非物質的表現にまで高められている。その検証の場としての空間

は、美術行為を表現しようとする者にとつては、重要な役割を持つ。この建物を包括する空間には、底知れぬ可能性と展開性があることが、美術関係者や作家たちから提案されている。

芸術が、日常の生活に溶け込むことによつて、人間の文化を発展させることになるのであり、人間の持つ自然観や情緒観との調和が可能になる空間が、今もつとも必要なものとして求められているのではないだろうか。

このように、記念館は古典の象徴であり、また、現代の芸術・文化のシンボリックな聖域としての建物と現代の神秘的な雰囲気を保つ建物として、その在り方についての期待がますます強くなっていくのではないかと思われる。

三——施設の管理・運営が市民の主体的な参加によつて生かされる

施設（建物）の物理的管理の発展性を高めるための民間経営思想の導入と、市民活動推進をバックアップする幾つかの試み。

①—公設民営（第三セクター、民活）方式の

試み

横浜市のみならず、公共施設の運営を第三セクターに委託することが、ごく当たり前のよう

になってきている。この記念館も、^{注1)} 社団法人横浜ボランティア協会が横浜市と委託契約を締結している施設のひとつである。

行政が「公」としての立場から政策的に設置した施設を、民間（公共性のある法人もしくは市民の代表によつて構成されている運営委員会）が管理運営するシステムを、我々委託を受けている協会では、「公設民営」と称している。「公設民営」における管理運営の特徴は、市民の自治意識を生かしながら、施設の管理や運営に市民の主体的参加を求め、市民の市民による施設を運営しようとする姿勢を基軸に据えていることであろう。さらに「市民本位」としながらも行政政策との調整を図り、「公」と「民」が一体となって運営できる体制づくりを目指しているのである。

②—市民参加のエネルギー（マンパワーとボランティアリズム）を開発する試み

ボランティアリズム

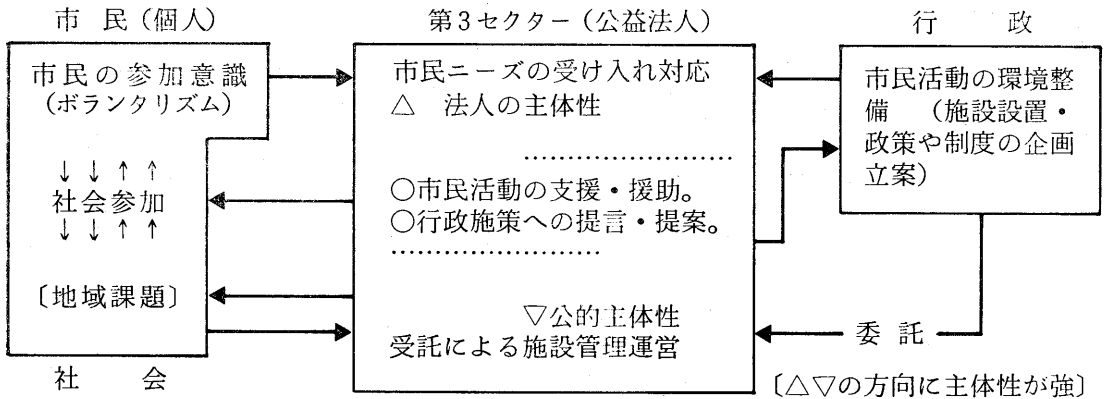
従来の施設は、管理を中心とした運営が主であったと言えよう。そして、市民が使用する「場」であり「器」であったとも言える。しかしながら、今日ほど、市民が自ら参加する施策が求められている時代はない。市民が、そのま

うな自治意識の高まりのなかで、行政施策に市民として参加しようとする意識が芽生えているのである。当然、公共施設に対しても従来の管理運営という一元的なものではなく、市民ニーズと行政施策の間に位置した関係のなかに市民の参加が求められている。それぞれの利益を考慮できるような第三セクターとしての役割が大切になっている。

市民参加の形態は、ボランティアなマンパワーとして発揮されることが望ましい。この記念館は開館以来、ボランティアの登録数が三〇〇人以上に達している。近隣に住む主婦を中心に、学生はもとより記念館の自主事業の運営に積極的に参加している音楽家や美術作家等、様々な市民がそれぞれの立場で参加している。特に、近隣に住む外国籍を持つ人々も参加していることは都市型施設の特徴とも言えよう。市民がボランティアとして記念館で活動できる方法は、現在大きくふたつに分けられている。

ひとつは、記念館や記念館を取り巻く環境の維持活動を中心とした、美化・清掃・整理活動である。特に美化活動は、自らの趣味を生かして園芸活動としても実施されている。公園内施設として、花壇づくりなどを緑政局の指導や協力を仰ぎながら推進している。ボランティアが自ら学び、自ら施設活動に関わっている例であ

図一 市民参加と等3セクターの役割



写真一 水曜コンサート



る。

一方、施設自身の企画事業に積極的に協力しているボランティア活動がある。この分野は、音楽や美術等の文化活動に造詣の深い専門家が多く参加している例である。記念館では、年間幾つかの自主事業を企画し実施している。このほとんどがボランティアの手によるものである。「水曜コンサート」や「秋の芸術祭」並びに、青少年や障害を持っている人々を対象とした事業も、地域の市民と連携して実施されている。

だれもが参加できる活動と、文化活動の専門家や学識経験を持つ市民がマンパワーとなって一体となり、あらゆる分野の市民が自由にこの施設へ参加できることになっている。

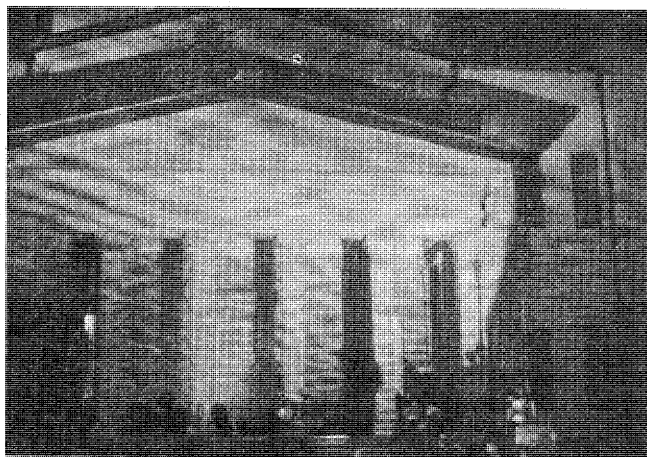
③ 共に築く文化（立場の異なりを認め合い

協調連帯する意識）を求めて

活動が施設内にとどまるのでは無く、すでに活動している団体や活動家との連携も大きな課題としてとらえることができる。「施設から地域へ」「地域から施設へ」という双方向の意識の交流のなかから、共に目指す地域課題の解決に取り組むことができるのである。

昨年八月に開催された「大倉山ライトアップフェスティバル」もそのひとつである。これは、地域自身が地域を活性化しようとしている事業であったものに、施設が会場の提供や事業の企画に必要な情報を提供し、地域の推進母体と共同して事業を実施したものである。このように地域事業や活動に施設はどんなバックアップが出来るのが課題なのである。そのために、施設にはあらゆる活動に必要な情報や人材、そしてプログラムを展開する為のスキル（技術や手法）やノウハウを蓄積することが大切なのである。

写真-3 大倉山ライトアップフェスティバル



四——地域の中での施設としての アイデンティティを求めて

施設には、地域と共に発展していく姿勢が求められている。

特に施設は、無意識のうちに、市民や施設を取り巻く様々な人や、催事によってイメージ化されてしまうものである。しかしながら施設そのもののポジショニングとでも言うべきものについて、やはりその施設自身によって明確にし

写真-4 大倉山商店街のセットバック前



なければならぬのである。

① グローバルな視点をもった コミュニティアクション

施設の問題についてよく問われる

ことがある。この記念館も横浜市立という公設施設であるために、当然横浜市全域を準備対象とするのであるが、国際化という社会課題のなかで、この施設のもつアイデンティティが改めて問われている。特に横浜市は国際都市として

写真-5 大倉山商店街セットバック後予想図



の発展を目指し、さらに、「ヨコハマ」というイメージのなかに必ずインターナショナルという意識が存在しているからである。当然、国際的とでも言うのか、地球規模とでも言うのだろうか、グローバルな視点をもって、ことに当たらねばならない時代になっていることは明らかなことである。

昭和六十一年の秋、国際平和年を記念して開催された「平和への対話展」は、西ドイツの美術作家を中心とした作品展示と国際的に活躍し

ているアーティストが参加した事業であった。

そして、この国際的な平和運動の一翼を、地域の施設が「グローバルな運動を地域というコミュニティからの参加」という行動として担うことができたことは、大変重要なことではないだろうか。地域(市域)施設が、このように国際的活動に参加することも大きな成果だと言える。

また、昨年実施されたライトアップフェスティバル事業(前出)において開催された「Art-Move 87」は、日本国内の美術関係者のみならず、国際的に活躍している作家からも注目された。特にこの事業は地域の施設が国際的アートシーンに、ライトアップという物理的な行為にこだわらず、精神的なメッセージを多方面に発信したことに大きな意義があったのだと言える。この様に地域事業から世界に向けてのメッセージが発信されることの重要性が、国際化を推進するひとつの方法ではないのだろうか。

②—まちの誇れる環境の一部として

まちは常に変化するものである。この大倉山記念館周辺も毎年著しい変化を遂げている。特にこの地域は、横浜市の副都心としての機能が期待されている新横浜駅周辺に隣接している。近年、港北区全域に新しい都市計画の息吹が感じられ、各行政機関の積極的な政策が実行され

つつある。交通・住宅・緑地等を中心とする環境整備が推進されている。

また、民間のまちづくりも、これと連動した形で開発されている。特に記念館を取り巻く商店街の積極的な環境整備には、目を見張るものがある。大倉山商店街は四つの商店街の連合組織であり、大倉山駅を狭んで記念館と反対方向の商店街が昭和五十八年店舗を後退させる、いわゆるセットバックすることにより商店街の近代化を図った。続いて、記念館に一番近い、商店街も現在セットバック工事が進行している。

特に注目するのは、商店の店舗建築が記念館に関連づけられた建築様式を採用し、町並み全体をギリシャ神殿風に整えようとする計画である。この工事が完了するにあたり、地域と一体となった事業を展開する計画が現在進められている。

五——これからのインテリジェントコミュニ

ニティ(情報化する地域)の核として

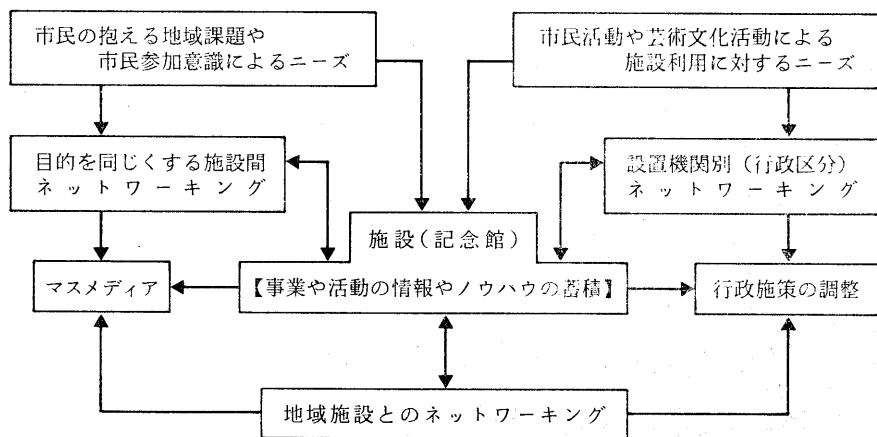
施設には、情報化社会という時代性をいかにとらえなければならないのか、という課題が投げかけられている。また施設間の情報交換システムの存在なくしてこれからの文化行政・文化活動の展開は不可能なのではないだろうかとい

う疑問も生じる。

最後に、これからの文化施設の運営についての提案と期待について述べておくことにする。

①—ネットワークによる発展性

図-2 施設をとりまくネットワーク



【 】が将来情報センターとして機能すべきである。

施設の代表者による連絡調整機能は、未だ整備されていない。特に公立施設間の連絡調整すら十分とは言えない。例えば、県立施設と市立施設との関係、音楽や演劇等の多目的なホール機能を持つ施設と、博物館・美術館・郷土館等のある程度限定された目的を持つ施設との交流については、なかなか実現しないのである。また、広域的施設機能を持つ大型文化施設と地域的なコミュニティ施設との連係・協力体制が必要なのであるが、それらを調整する機能が無いのである。特に、人的交流、情報交換等については早期に解決しなければならぬことではないだろうか。

②—ボランティアリズム（シビルミニマム）の 発展性

公共施設本来の目的である「市民のための施設」という視点からみると、国内ではまだまだ「市民本位」になる傾向が乏しい。公共の側にも市民の側にも施設が「公」の持ち物という意識が強いかもしれない。「公」はとかく行政機能

・行政施策と置き換えられる場合が多いことも確かなことである。そのために、「公」という立場から市民に貸し与えるという意識や、逆に市民の「公」から借り受けるという意識が大きな問題として残る。「市民の、市民による、市民のための施設」という市民意識というべき自治意識を、いかに「公」と結びつけることができるかが、今後の大きな課題となるであろう。ひとつの方法として、市民のボランティアリズムによる市民参加の原理を導入することがあげられる。記念館にしる、公会堂にしる、博物館や郷土館等の文化施設を管理運営する側のなかに、自然に市民が溶け込む姿を目標とすることが一例として考えられる。確かに「公」としての立場や「民」の意識の間に、大きな隔りがあることも事実である。しかしながら、市民の参加意識の高さがその地域の活力になっていることは事実である。ボランティアの導入と市民と共に文化を作り上げることを施設が考えるときに来ているのだと思われる。

△横浜市大倉山記念館館長▽

(注)

(1) 「社団法人横浜ボランティア協会。昭和五十年に法人格を取得した青少年の健全育成を目的とした法人である。現在、横浜市より受託している施設はこの大倉山記念館の他に「横浜市野島青少年研修センター」「横浜市青少年育成センター」がある。

(2) 「水曜コンサート」。地域の文化活動の実践として、主婦を中心とした音楽に興味を持つ市民が、音楽家と協力し毎週水曜日に定例で開催しているコンサートである。

(3) 「秋の芸術祭」。記念館を利用している市民を中心に実行委員会を結成し、毎年一月に二週間程美術・音楽・演劇・講座・文芸の部門を設けて実施している。

(4) 「大倉山商店街」。正式名称は、大倉山商店街振興組合。ひかり・さかえ・ゆたか・つつみの四つの支部に分かれている。先にセットバックしたのが、ひかり支部であり、通りの名称は「レモンロード」。現在進行中がさかえ支部であり、通りの名称が「エルム通り」となる。